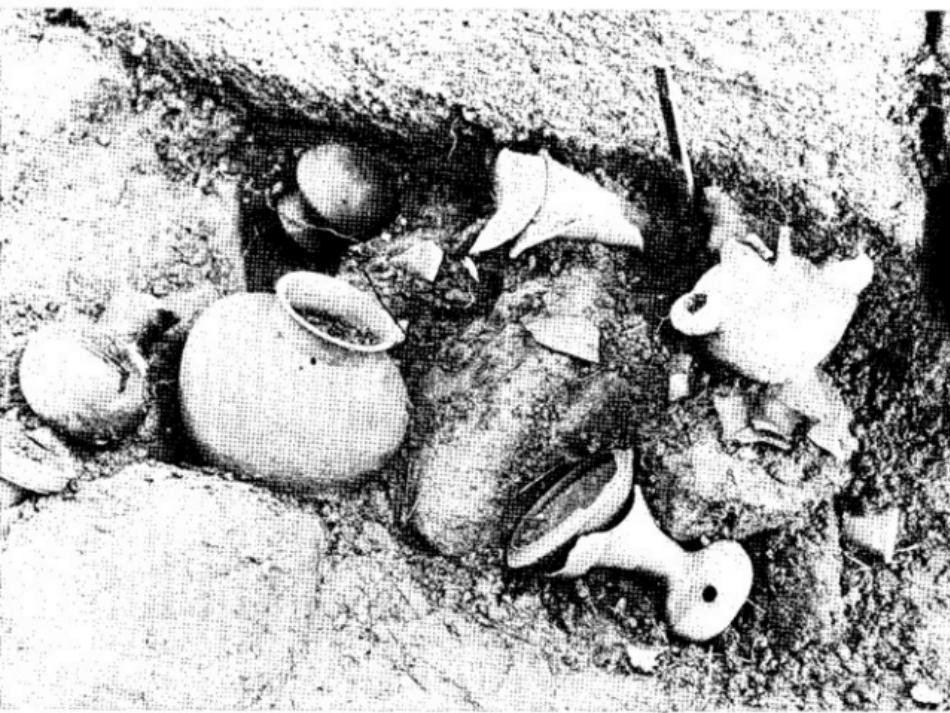




高知県舟岩古墳群

(高知県文化財調査報告書第15集)



高知県教育委員会

(昭和43年3月)



は　し　が　き

近時各種産業の近代化にともない、大規模な開発事業が起されて、埋蔵文化財の損壊される実情がしばしば聞かれるところである。

本県は、全国的にみて、古代遺跡の少ない地域ではあるが、最近南国市岡豊町において開拓パイロット事業として、ミカン園造成中、数基の古墳が発見された。しかも引き続き昭和43年度事業に計画された地域に10基以上の古墳の存在が確認され、これら古墳群の保存対策を検討したが、個人農家の経営する事業であるため、計画を全面的に変更することは困難とされた。そこで高知県教育委員会は国庫補助をうけて緊急調査を行い、記録保存をすることとした。

本書は、本調査の概報ともいべきもので、発掘担当者岡本健児氏、調査員広田典夫氏、同片岡鷹介氏の労をわざらわした。こゝに厚く謝意を表すると共に、広く本書が活用され、埋蔵文化財の保存に資することができれば望外のよろこびである。

なお、本調査に当って、南国市教育委員会及び土地所有者には全面的なご協力を賜った。ここに併せて感謝の意を表する次第である。

高知県教育委員会社会教育課長

安　岡

一

I 舟岩古墳群とその調査

南国市岡豊町小蓮舟岩付近の山林（岡豊八幡北方丘陵）がみかん園に変ぼうしはじめたのは、昭和40年の末であった。昭和41年10月みかん園上岡崎岩治氏よりの連絡により、古墳らしきものがあるとのことで調査におもむき、付近一帯に多くの古墳のあることを知った。さしあたりまもなく開墾され破壊される1号墳（小蓮舟岩1410番地所在）の発掘調査を高知県教育委員会と南国市教育委員会とで、昭和42年3月4日～8日までおこなった。

その後岡本、広田それに県教委池田主事、南国市教委武田主事4人で、昭和43年度に開拓パイロット事業として開発される事業区を調査の結果、10余基の古墳があることを確認した。ここにおいて高知県教委及び南国市教委は、開墾前に以上の古墳群の緊急発掘調査を国庫の補助を得て実施することになったのである。

発掘は昭和42年12月7日から12月17日まで第1次調査をおこない、12月22日より12月29日まで第2次調査をおこなった。第2次調査では1部測量が残ったため、年の明けた昭和43年の1月3～4日の両日これを実施した。

第1次・第2次調査では、パイロット事業で破壊される予定の2号墳から12号墳までの11基の古墳の発掘を実施した。本報告書は第1次・第2次の調査を主体にしたものである。

本報告書は岡本健児の執筆、池田真澄の編集による。写真は広田典夫撮影、古墳実測図製図は片岡鷹介による。折り込み古墳分布図は南国市土木課の作製したもので、片岡鷹介が修正・製図したものである。

舟岩古墳群調査関係者

発掘主体 高知県教育委員会

協力団体 南国市教育委員会

発掘担当者 岡本健児（高知女子大助教授）

調査員 広田典夫（横畠中教諭）・片岡鷹介（伊野町文化財委員）・池田真澄（県教委文化財係長）・地引嵩（県教委文化財係主幹）・久家豊一（南国市社会教育課係長）・武田勝（南国市教委・社会教育主事）

補助員 前田和男（窪川高教諭）・松本和男（別府大学生）・門脇道夫（国学院大学生）・高橋美佐子（高知女子大生）・小松信子（高知女子大生）・藤本千鶴子（高知女子大生）・梅原孝司（学芸中生徒）

協力者 高知女子大学生有志・高知大学学生有志・小津高歴史クラブ・高知農高農業土木科

有志・依光賀之（高知農高教諭）・中司盛郎（地主）・黒岩信雄（地主）ほか十数人

II 古墳群の概要

高知市より国道32号線を東行すること約8kmにして、岡豊山（長宗我部氏城跡）麓に着く。この山麓の北方約700mの所に志例池を眼下にみることのできる標高125mの小山丘がある。この山丘の尾根及びその斜面に本古墳群が存在する。

この斜面の西南側にある古墳として西より1・2・3・4・5・6・10・11各号の古墳がある。なお1号墳は2号墳に接しているが、小さな谷をその間に持っている。次に斜面の東北側にある古墳として12号・14号の2古墳がある。また尾根上にならんだ状態で西より7・8・9号の各古墳がある。

以上の各古墳のほかに1号墳の北方の独立の山丘上に13号墳、1号墳の南方、字名挾間に15号墳が存在する。なおこのほかに1号墳と15号墳にはさまれた字名池ノ谷においては、早くみかん園になり、その際6基の古墳が破壊されていることが判明した。

さて以上述べた破壊された古墳をも含めて21基の古墳に対し、われわれはこれを舟岩古墳群と呼称したいと考える。もちろんこのなかには從来から判明していた古墳もあり、それに対して呼ばれた古墳群名もあるが、これらを解消して舟岩古墳群とよびたい。從来より判明していた古墳を参考までに挙げると、15号墳・7号墳・8号墳・9号墳・12号墳・14号墳である。これらの古墳は『全国遺跡地図（高知県）』に15号墳は船岩古墳として、7・8・9・12・14は太平山古墳群として掲載されている。

III 各古墳について

(1) 1号墳

1号墳は舟岩の山頂より、すこしおりた傾斜面につくられている。発見された当初より墳丘はこわされていて、ただ石室の周囲のみ高くなっていた。石室は本古墳群中大きな部類に属する。石室の奥壁は大きな一枚石であって本古墳群中唯一のものである。結局1号墳は高知県の横穴式石室墳のなかで、巨石墳のなかに入れてよいものである。石室の石材は礫岩が多く、それに珪質砂岩も含まれている。これは今回の発掘した古墳にすべて適用することである。これらの石材は古墳群の存在する山丘に原石があって、いつでも古墳の石材として利用できうる状態にある。玄室内に架せられた天井石は4枚であったらしく、うち2枚は石室内に落ちてい

た。

玄室の床面は奥壁近くで2枚の割石を敷き、その敷石より玄門にむかって1.4mほど、こぶし大の川原石を一面に敷いていた。残りの玄室と羨道には敷石がなかった。また羨道部と玄室の境界に2個の大きな割石が据えてある。このような割石を1~2個、羨道部と玄室の境界に据えるのは本古墳群のすべての横穴式石室にみられる特色である。羨道部の天井石は2枚であったようで、この天井石は山裾に落ちていた。

1号墳出土の遺物は次のようにある。

大別	細別	玄室			羨道	合計
		東部	中央部	入口		
土器	土師器	高杯		破片		1
		蓋	つまみ付	1	2	3
		杯	2			4
		直口壺		2	1	3
		短口壺			1	1
	須恵器	金環	1	1	1	3
装身具	銀環		(対3組)	7		7
	丸玉(ガラス製)	1				1
	鉄刀			1		1
武具	鉄鎌	鐵	2	2		4
	刀	子			2	2
	繩(引手・衛・鏡板)			1対		1対
馬具	杏葉	葉			1	1
	雲珠			3		3
	辻金具			3		3
	革金具	1		6		7
	金具(革のしめ金具)	1	1	2		4

以上の出土遺物について、特に重要なものについて解説しておこう。

須恵器、蓋のうちつまみのないものに、それぞれ箆描沈線1本がつけられ、杯の一つの底部にX印の箆描沈線がある。窯印であろうか。将来の検討をする。また羨道より出土した蓋は、天地が反対になりかに炭がいつばい入っていた。また須恵器は特にその杯の形式から、(1)高知県における須恵器のⅣ式とⅤ式に編年されるものである。杯でⅣ式のものは羨道部から出土したものに多い。この須恵器の型式から本1号墳は7世紀前半から後半にかけてのものと推

定しても、大きな誤りはないであろう。

金銀環 合計10個出土しているが、対をなすものもあるので、結局7人分の耳飾りということができる。よって本古墳は7人は確実に葬ったものであるということができる。

鉄刀 鉄製柄円形の鋒が残っている。

鉄鎌 有茎細根式鉄鎌である。

馬具 本県下の横穴式石室墳で、本1号墳ほど馬具類が数多く発見されたことはない。杏葉の発見は県下ではじめてである。杏葉、雲珠、辻金具、革金具等は鉄地金銅張である。このように数多くの筋馬の装具である馬具を本古墳が出土したことは、本古墳の大きさとともに、被葬者の権力と富の強さを示すものであろう。

(2) 2号 墳

2号墳は発掘前において、やや椭円形の円丘をなし、その中央部が凹んでいた。測量の結果、本墳は径8.5mの円墳とみることができる。横穴式石室の天井石は一部抜きとられ、また石室内に落ちていた。しかし石室内部の遺物の保存状態は良好であった。石室の大きさは1号墳よりやや小さく、小さな割石を使った所に特色がある。

玄室内の床面は奥壁から約2mまで、方形の30~40cm大の自然石を一面に敷き、その上にさらに小円礫を一面に敷きつめている。残りの玄室及び羨道には敷石がなく、地山にそのまま遺物が置かれていた。もちろん敷石をしきつめたところは、その上に遺物が配列されていた。

出土遺物を表にしてみると次のようである。

大別	細別	玄室			羨道	合計
		奥部	中央部	入口		
須恵器	蓋	1	1 つまみ付	1 つまみ付 2		6
	坏		1			1
	有蓋高坏	5		3		8
	萬	1		2		1
	方持高坏	1				1
	子持壺		1			1
	合付直口壺	1				1
	直口壺	1				1
	短口壺	2	3	3		8

	壺		1			1
	砾		1			1
	甕			破片	破片	
装身具	銀環	(対)	2			2
	鏡		1			
武具	つばぜり		1			
	鉄	鐵	6	1	1	8
	鉄刀	子	2	1	1	4
馬具	轡			1		1
工具	鉗		1			1

以上の出土遺物について、特に重要なものについてのみ解説しておこう。

須恵器についてはまずその編年的位置づけであるが、玄室中央部から狭道にかけてのものは、ほとんどがⅥ式のものである。それに対し玄室中央部より奥にかけてのものは、圧倒的にⅣ式である。これは本古墳が追葬を行った証拠にもなるものである。

本古墳の須恵器について、いま一つ注意すべきことは、その出土数の多いことである。県外先進地域の古墳であれば、これ位の数はすぐない方であろうが、高知県では今のところ最高の出土数である。さらにそれらの須恵器の中に、子持高杯、子持壺の如き装飾付の須恵器があること、またなかには一部であるが、焼け損じの須恵器も副葬していること、そして本古墳群の他の古墳にみられる土師器が一つも発見されることである。このような点から本古墳の被葬者が1号墳の被葬者と、その職業的性格が異なるものでなかろうかとの考えをおこさせる。

1号墳の被葬者の比較の問題に閑遙して、とかねばならないものは馬具についてである。本2号墳では馬具として轡だけしか発見されていない。これは1号墳の被葬者が駒馬であるに対し、2号墳の被葬者の持つ馬具はまったく実用的な乗馬に必要なものだけである。このような馬具における差異は、被葬者の経済力ないしは身分的な差異を示すのでなかろうか。なお本2号墳は須恵器などから推定して、1号墳と同様に西暦七世紀代のものとしてよいだろう。

(3) 3号墳

2号墳の南に3号墳がある。この古墳は発掘前から石室の一部、それも天井石などが露出していた。それでも円丘はだいたいの形をとっていて、径10.5mであった。発掘の結果本3号墳は、かって攪乱されたことがあるらしく、玄室の散石の状態なども定かでなかった。しかしそれでも遺物は相当数発見されている。

発掘された結果本3号墳の横穴式石室は、本古墳群中最大のものであった。1号墳よりもやや大きく、石材も大きなものを使用しているので巨石墳のなかに入れてよいものである。大井石はほとんど取られているが、二枚大きなものが残っている。

本3号墳より出土した遺物は次のようなものである。

大別	細別	玄室			羨道	合計
		東部	中央部	入口		
須恵器	蓋			1		1
	坏			1	1	2
	高坏	2			2	4
	合付直口壺			1		1
	直口壺	1			1	2
	短口壺				1	1
	壺	1		1		2
装身具	銀環	(1対)	2			2
	鍔	2				2
武具	つばぜり	1				1
	鉄鏃	3				3
	鉄刀子	1				1
馬具	轡	1				1

3号墳では羨道より横甕が発見されている。11号墳からも横甕が出上しているが、横甕が古墳から発見されるのは、高知県では初めてのことである。3号墳の須恵器は盗掘されて数すくないうらみはあるが、発見されているものより本地方の第V式のようである。

馬具は2号墳と同様に轡だけしか発見されていない。これも盗掘あったかも知れないが、一応現段階では1号墳の馬具との比較論は2号墳の場合と同様にいわざるを得ない。ただこの事に関連して、3号墳の石室の大きさからしてはちょっと納得がいきかねる。もし石室が大きくても、馬具の差異があることになればそれは身分的な差異に根ざしたものでなかろうかと考える。

刀の鍔は大小二個発見されている。鍔からみて余り大きな刀ではないようである。

なお本3号墳は玄室は荒されているが、羨道部は余り荒されていない。そして羨道の西側から須恵器が列べられて発見されたのは、注意すべきことである。

(4) 4号 墳

4号墳は3号墳とならんだような状態にあり、羨道口のむきも同一である。

発掘前は円丘をなし、径10mであった。発掘の結果、円墳の径に比較して石室が非常に小型であることが判明した。本古墳群では最小のものである。石室の大きさからいって、せいぜい1人ないし2人位までしか葬ることのできない古墳である。小さい古墳ではあるが、その築造はしっかりしている。ただ羨道部の幅が、玄室の幅にくらべて広いことは、本古墳群中の多くの古墳とは異なる。このような古墳は本地方では、だいたい横穴式石室墳の終末に出現する傾向がある。

本古墳出土の遺物は次の通りである。

大別	細別	玄室			羨道	合計
		奥部	中央部	入口		
土器	土師器 高杯	5				5
	蓋	1		1		2
	杯	1		1		2
	須恵器 短口壺			1		1
	提瓶	1				1

遺物も土器だけである。しかもその土器のうち、土師器の占める割合が大きい。しかも本古墳の遺物の配列状態をみると、余り荒されていない。このようなところから本古墳は、本古墳群中もっとも貧弱な古墳といわざるを得ない。石室の大きさもあわせて貧弱である。提瓶は石室の奥壁にそって立たされ、胴部以下は敷石が囲み、動かないようにしていた。葬者の枕元に置いたものであろうか。出土の須恵器は本地方のV式に当たるもので、七世紀中葉のものと推定してよいと思う。

(5) 5号 墳

5号墳も3、4両号墳とならんだ状態にあるが、その位置が高いところにある。この古墳は羨道なども相当に荒されていたが、それにしては遺物が多く発見された。墳丘は円墳であって、径9.3mであった。天井石などはほとんど破壊され、一部は石室のなかに落ちこんでいた。石室は両袖にして、敷石は奥三分の一程度に川原石を敷いていただけである。

出土遺物を表にしよう。

大別	細別	玄室			合計
		奥部	中央部	入口	
土器	土師器	壺	1	2	3
		壺		1	1
		形式不明	1		2
	須恵器	蓋		5	5
		壺	2	4	6
		高壺		1	1
		有蓋高壺		3	3
		合付直口壺		1	1
		直口壺		1	1
		壺	1	2	4
		合付壺		1	1
		形式不明	1		1
装身具	銀環	(1対)	2		2
	管	玉	1		1
武具	鉄	刀	1		1
	鉄	刀子	1		1
	鉄	繩	3	2	8
馬具	轡		1		1
その他	木炭	片	少量		少量

5号墳出土の須恵器はV式・VI式の2型式である。VI式が玄室の入口付近において多く発見されている。本古墳において銀環は1人分しか発見されていないが、型式の異なる須恵器の存在から、追葬はあったと考えてよい。刀と馬具はかさなって、石室の奥部より発見されている。

(6) 6号墳

円墳でその下に横穴式石室がこわれずに残っているのは、本墳と12号墳だけである。本墳の周囲はすこし凹んでいるが、これは円墳を作った時、周囲の土砂を取って盛ったことを示している。

横穴式石室は破壊されず、天井石も残ってあるけれど、古くから開口していたらしく内部は荒されている。敷石も玄室奥部にすこし残存していた程度である。それでもふるいにかけて発掘した結果、次のような遺物をえた。

大別	細別	石室			横道	合計
		奥部	中央部	入口		
土器	土師器	杯		1	1	2
		形不明		1		1
	須恵器	蓋	1			1
装身具	銀環	2	1			3
	玉	勾玉		1		1
		管玉	1			1
		切子玉		1		1
	小玉	1	2	1		4
武具	鉄鏃	1	1	4		6
馬具	飾金具		1			1

6号墳は片袖式の石室のようであるが、わざかな袖がみられるので、厳密には両袖式であろう。本古墳からは土師器製の杯が出土している。それも須恵器の杯と同形式のものである。9号墳からも発見されている。この土師製杯も、今回の発見が県内最初のものである。この杯破片の型式から、これが須恵器杯のV式とM式に該当する破片であることがわかっている。本古墳からは銀環3個が発見されている。これはすべて対をなさないので、3人分の銀環ということになり、最低3人の追葬が行われたことを物語っている。本墳で注意すべき今一つの点は三輪や手綱を飾った飾金具（菱形のもの）が出土していることである。馬具におけるこのような飾金具の出土は、1号墳のもの程多量に発見されてないが注意を要すべきことである。

(7) 7号墳

7号墳は6号墳に接して美しい円墳状であったので、多くの遺物の出土をも期待したのであったが、古墳はまったく荒されたものであった。石室は破損されてまったくなく、ただ奥壁の一部、側壁の一部が残っていたにすぎない。このように石室の石がまったく運びさられたのは、いつのことか判明しない。それでも発掘の結果、石室の残存の石の付近から次のようなものが発見されている。

土器	須恵器	蓋	1
土師器	形式不明	破片	7

須恵器蓋の破片は、V式の須恵器に属するものである。

(8) 8号墳

6、7号墳に接して8号墳がある。8号墳の墳丘は本古墳群中、大きい方に属する。墳丘が大きかったので、内部の石室の状態も保存が良いのではないかと思ったが、発掘の結果は天井石は落ちこみ、側壁はこわれているという状態であった。特に玄室の奥の方をむいて左側の側壁のこわれがひどかった。これは8号墳だけではなく、本古墳群のどの石室をみても左側の側壁が弱いようである。

8号墳の石室は本古墳群中、もっとも長い。1号墳や3号墳の石室と比較すると細長い。出土した遺物は次の通りである。

大別	細別	玄室			漢道	合計
		奥部	中央部	入口		
土器	土師器	破片		1	1	2
	須恵器	蓋		1		2
		坏		1		1
		高坏	1	2	4	7
		子持高坏			1	1
		壺		1		1
		短口壺	1		1	2
		壺		1		1
		縁		1		1
	甕				1	1
装身具	金環			1		1
	銀環	(対1組)	(対1組)	3		5
武具	鉄刀			1	1	2
	鉄刀子	2		2		4
	鉄鎌	2		7	1	10
馬具	飾金具			1	1	2
その他	砥石	1				1

8号墳出土の須恵器はN式に属するものである。また金・銀環は四人分であって、最低四人の追葬が考えられる。鉄刀二本が出土しているが、長さ3.5cmの大きい刀子も発見されている。鉄鎌は本古墳群、他の古墳にも発見されている主頭形のものもあるが、のみ頭形のものも数本出土している。

馬具は本古墳から数多く出土しなかったが、長方形をした板状の飾金具と歩幅付半球形飾金具の断片とが発見されている。後者の半球形は平面が六花形になったものである。この二つの飾金具は鉄地金銅製である。玄室内から発見された粘板岩製の砥石は、他の古墳からも発見されている石器と同時代のものとみてよいであろう。

(9) 9号 墓

9号墳は尾根の上を通っている山道の下にある。山道が9号墳の所で、登り下りているのは墳丘のせいである。石室は余り大きくなく、また羨道部のこわれもひどい。

大別	細別	玄室			羨道	合計
		奥部	中央部	入口		
土器	蓋	1		1		2
	坏		2	1		3
	破片		2			2
	蓋		1	2		3
	坏	1	1	2		4
	須恵器					
須恵器	高坏		1			1
	短口壺		2			2
	直口壺		1			1
	金環	2	(対1組)	2		4
装身具	金環					
武具	刀子	1	1			2
馬具	轡残片	1				1

9号墳出土の須恵器はIV式とVI式とである。土器の坏はIV式の須恵器に対比できるものである。また須恵器で注意すべきことは、特別小形の高坏や坏が出土している。たとえば坏の径7cmという小形であるが、このような小形の須恵器については特別の意味はないものであろうか。金環は3人分である。

(10) 10号 墓

10号墳は円墳をなしていたが、はじめより特に中央部が凹んでいた。特に凹んでいた理由は、ある時期にこの古墳が天井部を抜き取られたためである。ある時期というのは、キセルが石室内から発見されたことで、池戸末期～明治にかけてのことと考えられる。これをうらづけるように、土地の人の話によると、明治の初めにこの古墳の付近に石取場があったということである。故に本古墳はすでに一度荒され、大半の遺物を失っていた。

大別	細別	玄室			漢道	合計
		奥部	中央部	入口		
土器	土師器 破片		3	1		4
	須恵器 蓋(つまみ付)		1			1
	須恵器 破片	2	2			4
武具	箭		1			1
	鐵 鐵	7				7
馬具	韁 金具			1		1
その他	打製石鐵		1			1
	キセル	1				1

10号墳出土の須恵器はⅣ式である。

(11) 11号墳

11号墳は円墳の径は、本古墳群中大きいものに属する。石室の天井石などは一部持ち去られ、また玄室内に落ちていた。石室は他の古墳と比較するにそう大きくない。

大別	細別	玄室			漢道	合計
		奥部	中央部	入口		
土器	土師器 高坏		2			2
		蓋	2	1		3
		坏	1	1		2
		高坏		1		1
	須恵器 台付蓋 直口蓋 壹 横壹		1			1
		台付蓋		1		1
		直口蓋		1		1
		壹		2		2
装身具	銀環	(1対)	1	1		2
	打製石鐵			1		1

遺物は銀環と土器だけであって、3号墳よりすこしまし程度である。須恵器はⅣ式とⅥ式である。また副葬した須恵器のなかに、焼で焼いた折焼き損じたものを2~3含んでいる。これらは全く日常の用には使用できないものである。床面から先史時代の打製石鐵が1個出土している。この付近に先史時代の遺跡があるのであろうか。

(12) 12号 墳

12号墳も6号墳と同様、墳丘も石室も完備した古墳で、これも早くより開口していた。それが放荒されていて、敷石の位置もくるっていた。発掘の結果、次のような遺物をえている。

大別	細別	支室				表道	合計
		奥部	中央部	入口			
土器	壊				1		1
	須恵器 高壊				1		1
	壺破片	1			1		2
装身具	銀環			1	1		2
	鉄刀	1					1
武具	鉄誠			1			1
	帶				1		1
馬具							

銀環については2人分であり、また須恵器の示す型式はV式である。この古墳をおりたところに14号墳があるが、これは開墾地区外であるので発掘はしなかった。

IV 結び

以上発掘調査した1号から12号までの古墳の概要を表にして比較してみよう。

号	墳	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	単位
円墳の径	/	8.5	10.5	10.0	9.3	11.5	12.0	12.5	10.0	10.7	12.8	8.0	m	
横穴式	長さ	8.6	8.6	8.8	4.8	5.4	7.4	/	9.0	5.4	7.0	6.4	5.4	m
石室	最大幅	2.14	1.94	2.34	1.26	1.9	1.66	/	1.84	2.06	1.9	2.0	1.8	m
表門の方角	東南西北	西南	西南	西南	西南	西南	東南	東南	西南	西南	西南	東南	東	
方 向	和名抄の郷部	宗江江江江	江江江江	江江江江	江江江江	江江江江	宗江江江江							
金鏡環による人数	7人					3人		4人	3人				2人	
馬具	鈴馬	○				○	○	○						
	帶のみ		○○○○						○			○		
	なし			○								○		
推定年代	七世紀	前半												
		中葉												
		後半												

以上の表から本古墳群における諸問題を述べよう。

1 古墳群のなかで、羨道口の向の異った古墳が相接している。これをどのように解釈するかが一つの問題である。地形的にはほとんどの古墳が谷に羨道口を、直角に向けて作っているのは事実である。しかしこのような地形にのみ左右されたとのみ解釈するのは、ものたらない。やはり葬者の住いの方を向いているのではないだろうか。その場合一つのよりどころになるのは、九世紀頃の郷である「和名抄」にある郷である。これを参考までに表のなかに記した。

2 横穴式石室については追葬が行われるのは一つの常識である。その場合すくなくとも土佐のものは、何人位の人が追葬されたかが、この古墳群の調査で判明した。

3 次に馬具を持つ古墳、持たない古墳、そして持つ古墳には轡だけ出土したものと、飾馬のあるものとに分けられる。いわば馬具を通して、三つの段階のものに分けられる。この三つの段階は、その背景として階層的なものにつながっている。これを物語るかのように飾馬としての馬具の出土した古墳の石室はだいたい大きい。その点3号墳などは飾馬としての馬具が出土すべきであるが、これは発見されていない。これは3号墳が盗掘によってそれらがなくなってしまったとみてよいだろう。なお乗馬の風が土佐では七世紀代に圧倒的に多くなったことは、本古墳群調査の結果認められたといってよいだろう。

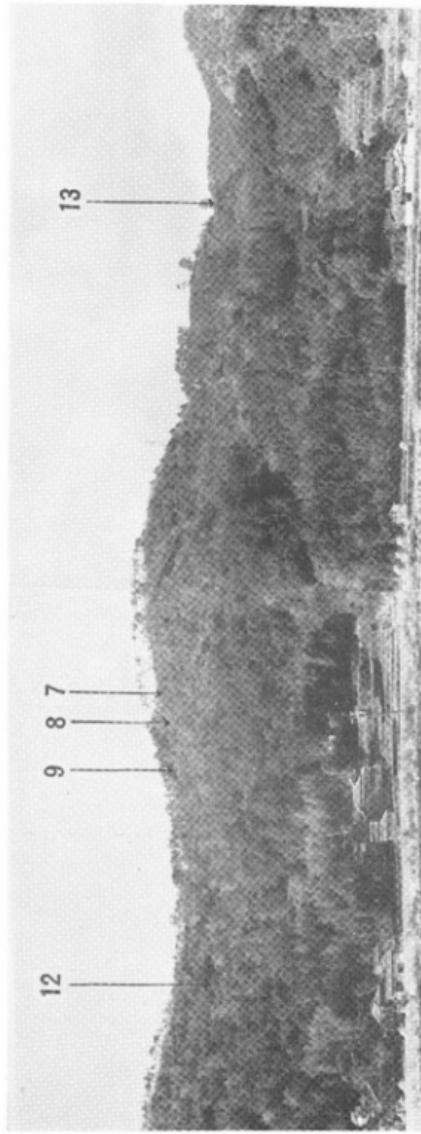
4 大刀はすべての古墳から発見されるのが本体であろう。そして本古墳群調査の結果、発掘された刀がすべて70cm前後の大刀であって1mに近いものは全然発掘されていない。ところが南国市明見彦山3号墳や長岡郡大津村高天原三ツ塚下墳のごとき古墳よりは1m前後の大刀が発見されている。これは如何なる理由によるのであろうか。彦山3号墳や三ツ塚下墳がどちらかというと、今回発掘した古墳群より時期的に古いということからくる現象か、あるいは土佐における地域的な現象か、将来検討すべき問題点であろう。

5 本古墳群のうち発掘調査した12基の古墳はすべて西暦七世紀代に位置づけられると推定されるが、発掘されずに保存すべき15墳の如きは、あるいは六世紀代に遡るものであろう。

(注1) 須恵器を6つの型式にわかったものを本報告書では採用している。

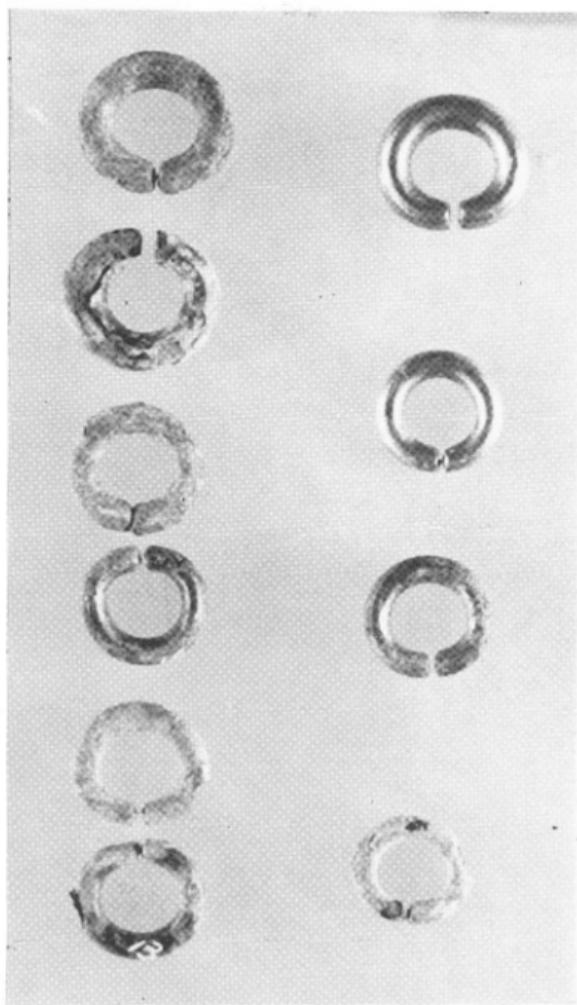


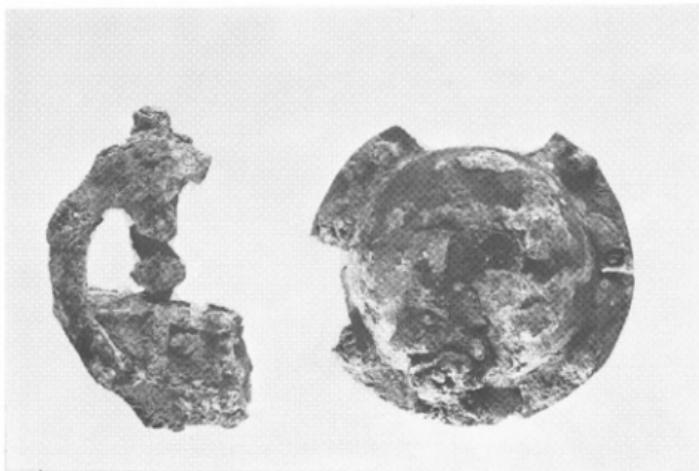
中央の山丘が古墳群のあるもの（西南側斜面をみる）



東北側斜面及び尾根上の古墳（番号は古墳番号）

1号墳出土の金銀環





1号墳出土の香葉と雲珠



2号墳（淡門より奥部を見る）



2号墳玄室敷石上の須恵器



2号墳玄室地山上発見の須恵器



2号墳出土の子持高杯



3号墳全景（発掘前）



玄室より漢道を見る（3号墳）

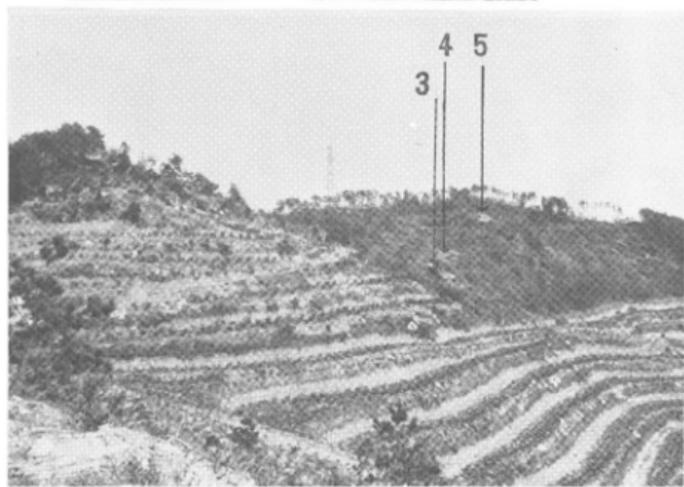


3号墳の漢道出土の須恵器

4号墳の石室を上からみる

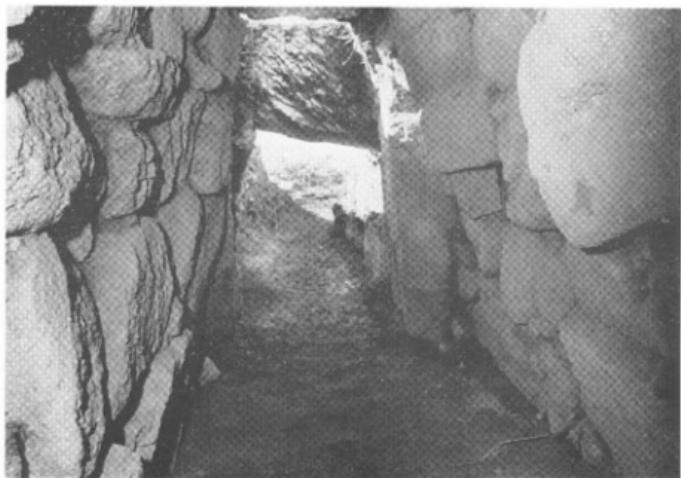


3、4、5の各古墳





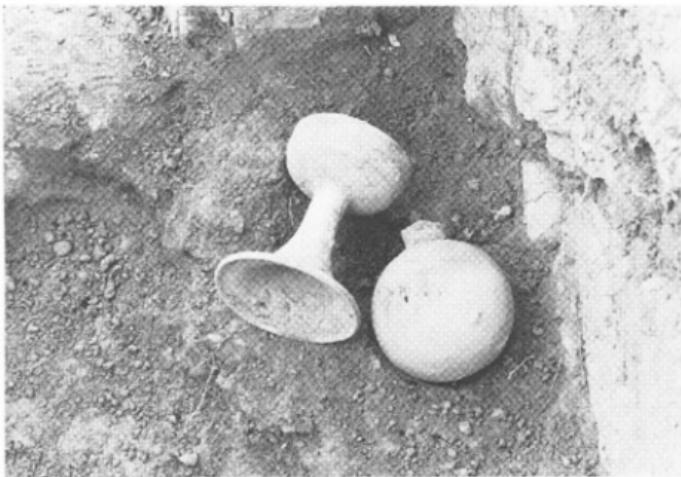
6号墳 墳丘



6号墳 (石室奥より外をみる)



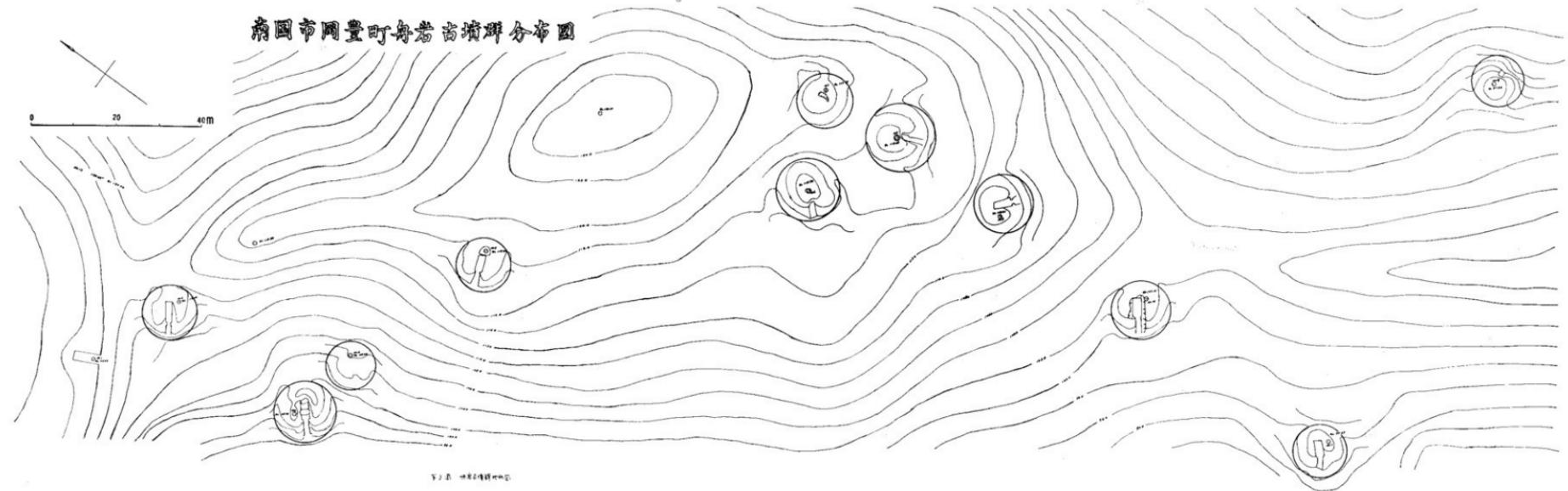
11号墳 玄室奥より 漢道をみる

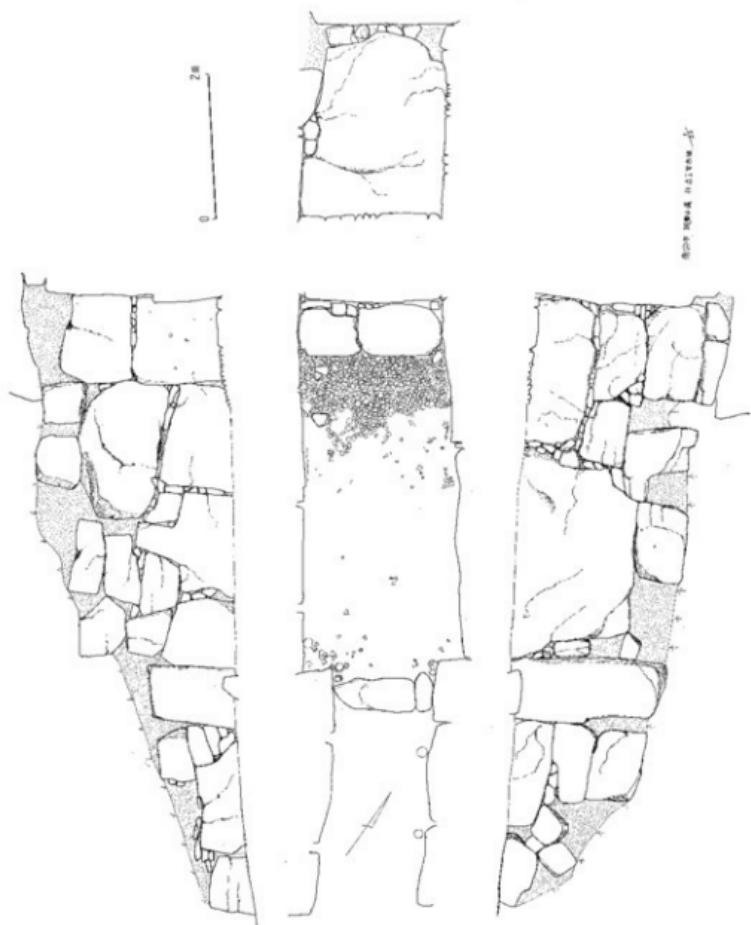


11号墳須恵器（高杯と横甕）出土状況

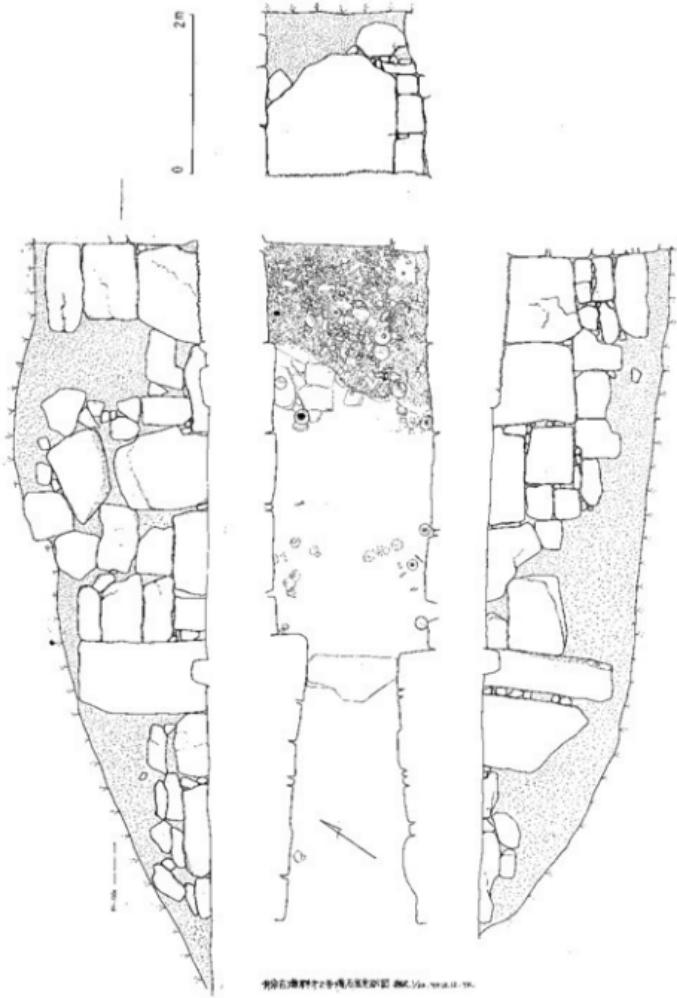


12号の円墳



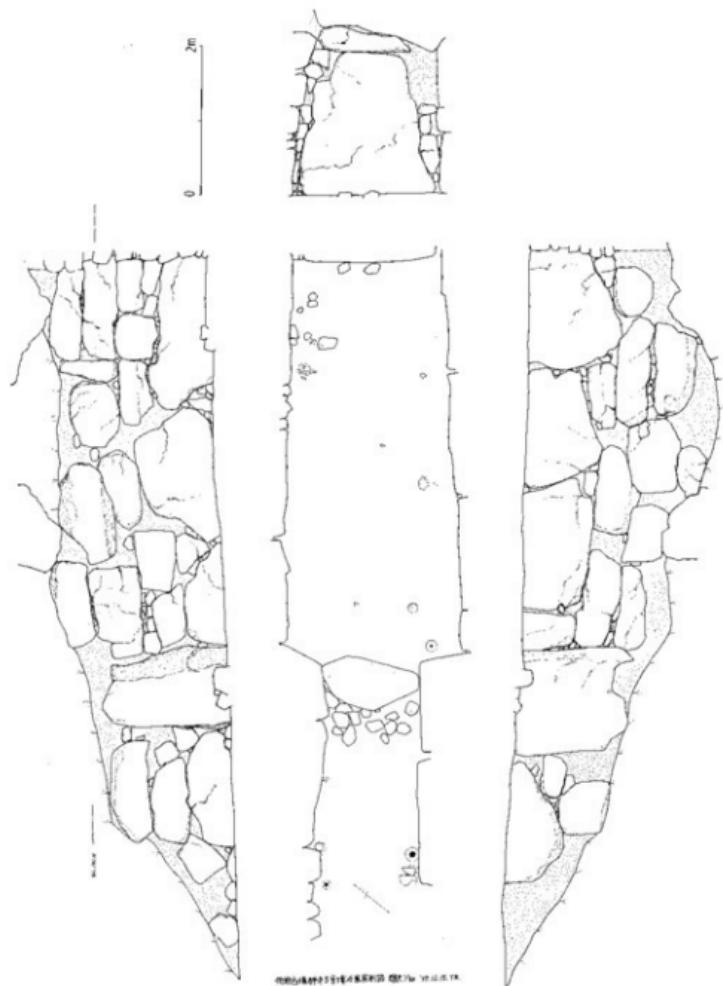


1号 墓

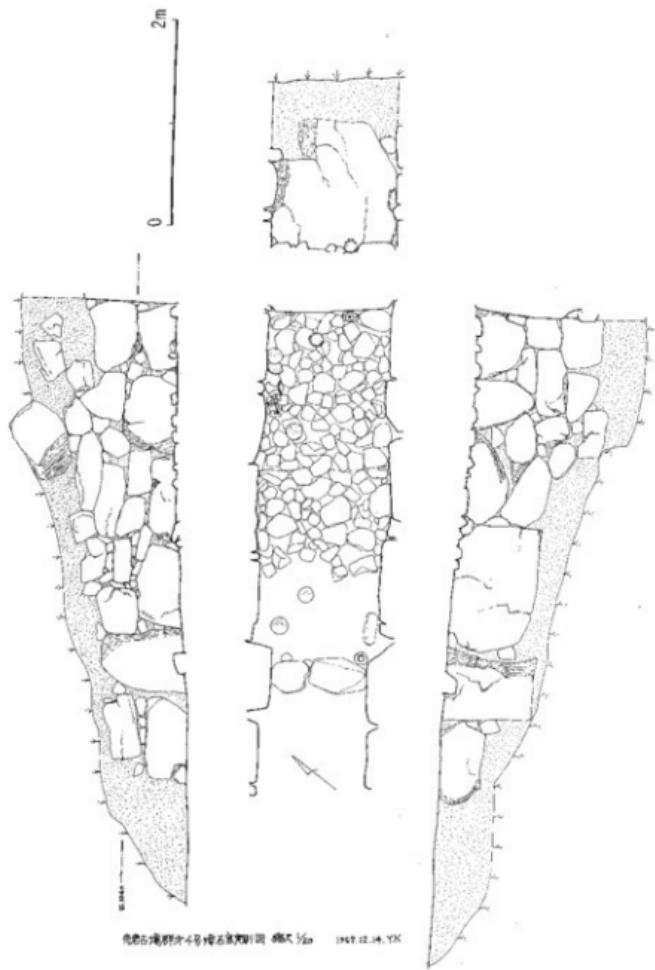


2号墓石器之多格石质罐(高20.5cm)

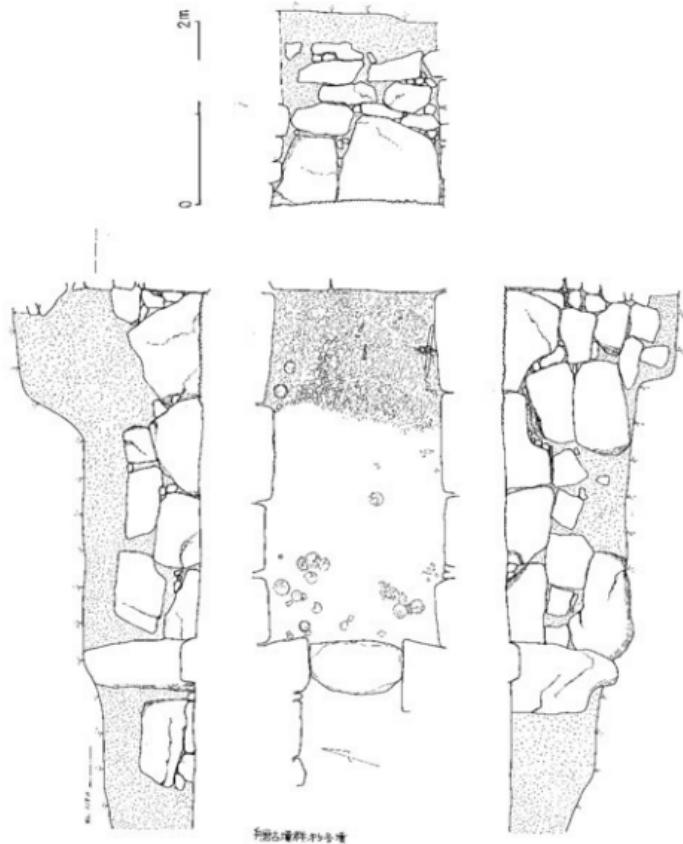
2号 墓



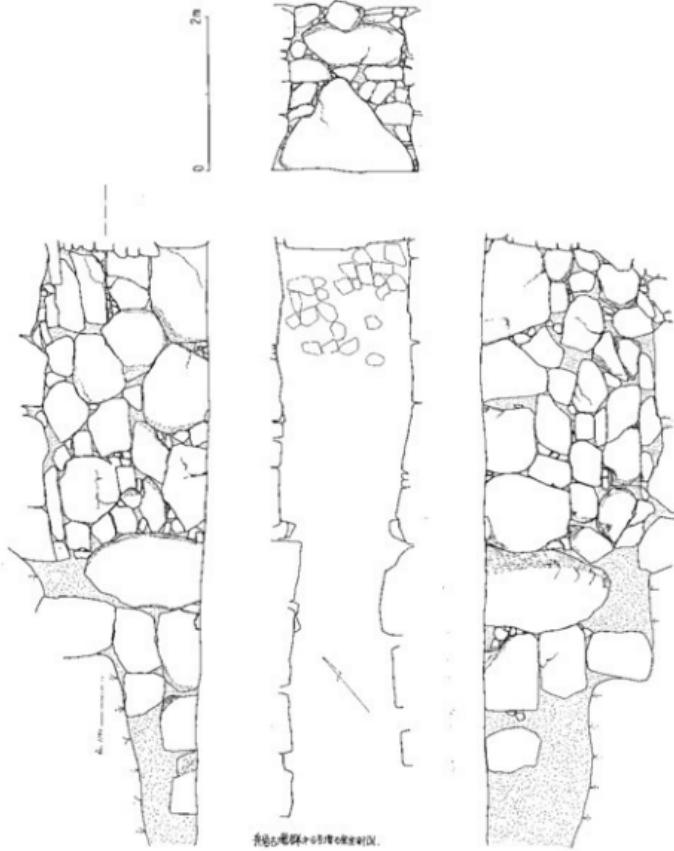
3号填



4号坑



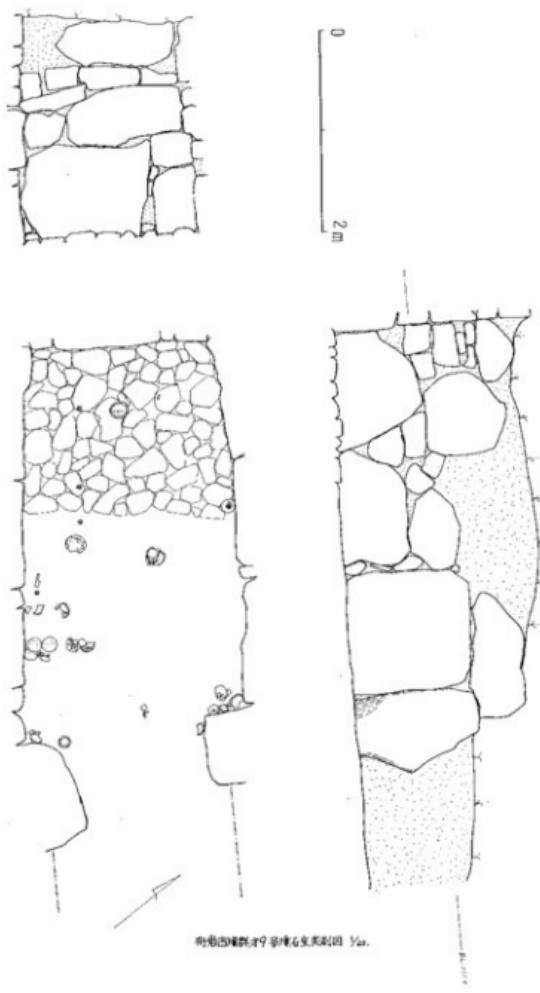
5号 墓



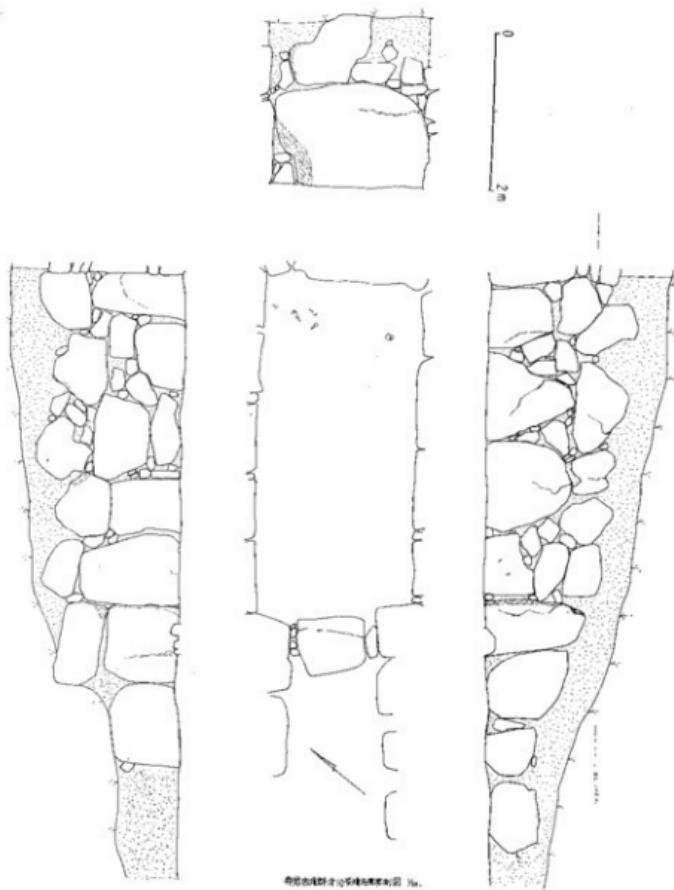
6号墳



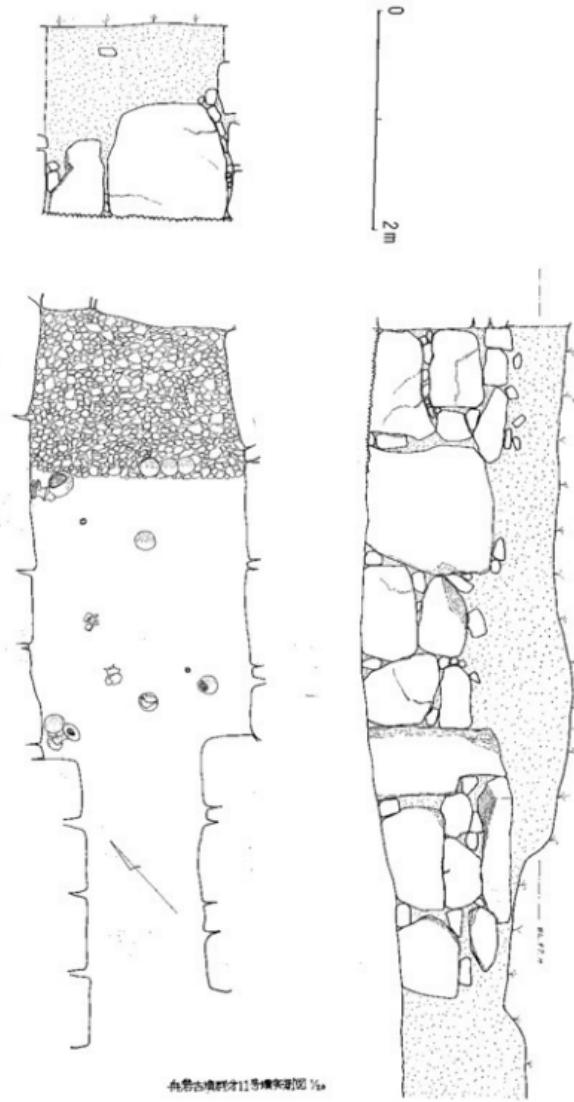
8号 墓



西周时期9号墓石室剖面图



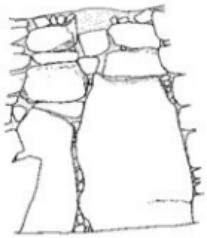
10号填



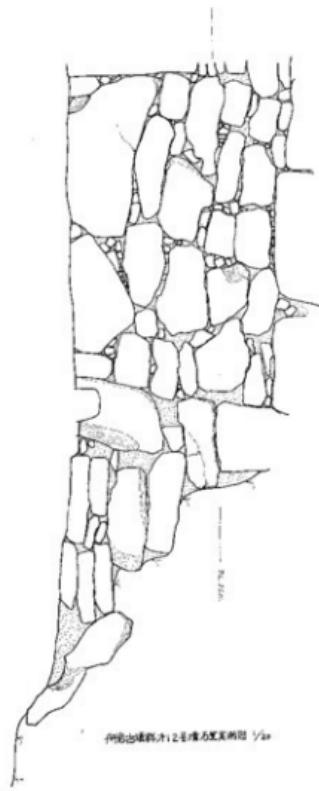
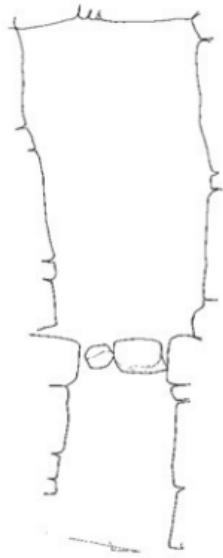
冉庄古墓群第11号墓剖面图

11号 墓

- 38 -



0
2 mm



中国古植物志 12 号 滇黔川渝组 1/2a